

底辺をかける

底辺を掛けるのだった
つい忘れてしまうのだ
面積を知る第一歩は
底辺を掛けること

底辺は存在するのだ
つい忘れてしまうのだ
世界を知る第一歩は
底辺で生きること

底辺が思い出されなくてはならぬのだ
詩人が著名になるのでなく
しずかにしたたかに
誰ともつかぬ足跡のしみを
目立たせなくてはならぬのだ

底辺を
甘く見るな、憐れむな、施すな、溺れるな、怒りつづけるな、悲しみつづける
な、エールの熱も、ブランケットのぬくもりも、底辺を隠す

底辺で
集団をつくるな、運動をするな、スローガンの貝殻と、シユプレヒコールの波
濤は、重なりぶれて、底辺を見誤る、みずから

倒れるまえのちからで
ひとりずつ
ひとりずつの重い足音を

踏みしめて
しめせ

断崖に遮幕を施した台形の高原で
パーベキューパーティーをする者たちのために
そびえ立つように見える山の頂に
我が旗を突き立てる者たちのために
わたしは詩人なのだ（さあ嘲り笑え）

手綱を引き締めて降りてゆく

底辺を駆ける

どこにでも居るようで

そこにしか居ない

生きる小石に会いにゆく

そこでこの足で立ち

つい忘れてしまう者たちのために

殴り書かず叫びもせず

ちいさくてかるやかで消えない声と

著者の名を思い出せない有名な詩集を

己のうちに求めることをやめない、と

きつく目を閉じて

小石につまづいて

空の高みを仰いで

胸の拍動を見つめて

ああ、

つい忘れてしまうわたしのために

ここには鏡もいるようだ